ハイケルプエキスの使用方法

葉面散布の特徴

植物は栄養分の吸収を植物体の全表面で行い、葉面からの栄養分の吸収利用率は高く、吸収速度も速い。
土壌施用に比べ数倍から20倍の効果が期待出来るとも言われています。
微量要素の欠乏は、特定の成分だけが欠乏するのでは無く、類似の成分が同時に欠乏している場合が多いので、葉面散布には海で育った海藻（ハイケルプエキス）の総合栄養素の補給が理想的です。

散布方法

苗床	本圃
水稲：300～500倍希釈液 野菜：500～800倍希釈液	野菜：500倍 ※作物が弱っている時は800倍 果樹：芽出し肥の場合は500倍 ※災害回復を目的とする場合は800倍～1000倍を3日おきに2回散布、翌週には500倍～800倍希釈液で使用して下さい。

散布回数

野菜：通常1～2週間隔で4～7回散布します。
果樹：1～2週間隔で5～10回くらい散布して下さい。（樹勢回復を考えれば収穫後2回の散布が望ましい）

効果が大きく期待出来る使用場面

1.定植後の活着促進、ムラ直し、根の強化
2.初期生育の促進
3.微量要素欠乏時の補充と回復
4.風水害・凍霜害・薬害・病害虫の早期回復
5.収穫前後の充実と体力回復
6.春先、果樹の根が充分に伸びていない時（新芽の活力が旺盛となり生長が進む）

上手な使い方

1.散布は朝露が落ちた後、夕方が最適です。（日中、日射しの強い時の散布は避けて下さい）
2.散布は葉の裏表が充分に濡れる様にしてください。
3.農薬との混合散布は合理的な使用方法ですが石灰硫黄合剤などの強アルカリ剤との混用は避けてください。
4.液肥との混用も相乗効果が期待できます。

ハイケルプエキスの使用目的・方法一覧

葉面散布

作物	目的	散布濃度（倍）	散布時期	使用回数
育苗＆定植				
水稲	徒長、ムレ苗防止、活着促進	500	2葉期～田植え直前	2～3回
トマト、ピーマン	微量要素の補充により 充実苗の育成、活着促進、植え傷み防止	500～800	3葉期～定植直前	2～3回
ナス	同上	500～800	3葉期～定植直前	2～3回
スイカ、キュウリ	充実苗の育成により接木時の 活着促進、植え傷み防止	500～800	本葉展開期～定植直前	2～3回
葉菜類	徒長防止・植え痛みの防止	500	本葉展開期～定植直前	1～2回
イチゴ	アンモニア栄養作物での 体内硝酸態窒素の軽減、植え傷み防止	500～800	親床定植後～子株移植後	3～4回
	微量要素の補充及び 展開葉促進・新根発生・活着促進	500	育苗期に1週間間隔	3回
メロン	植え痛み防止、活着促進、 毛細根の充実、徒長防止	500～800	2葉期～定植直前	2～3回
花卉	毛細根の充実、活着促進	500～800	3葉期～定植直前	1～2回
本圃				
トマト	微量要素の補充、成り疲れ防止	800	定植後より	4～5回
イチゴ	成り疲れ防止、アンモニア栄養作物での 体内硝酸態窒素の軽減	500～800	定植後～収穫期間中	4～5回
メロン	整枝後の樹勢回復、糖度アップ	500～800	定植後～交配前後	3～4回
キュウリ	曲がり果の軽減、成り疲れ防止、樹勢回復	800～1000	定植後～収穫期間中	随時
ナス、ピーマン	花芽の充実（落果防止）、 成り疲れ防止、樹勢回復	800～1000	定植後～収穫期間中	随時
葉菜類	硝酸態窒素の軽減 （cf：食品安全基準の制定準備中）	500～800	播種定植後～収穫直前	3～4回
サツマイモ	微量要素の補給（亜鉛欠乏の回避）、肥大促進	500～800	挿し苗時の灌水、活着後	3回
大根	肥大促進（早期出荷による収益の向上）	500～800	根茎肥大期	2回
マメ類	着花率・さや付きの向上、 肥大による増収と品質向上	500～800	本葉4葉～開花前後	3～6回
果樹（柑橘）	微量要素の補給（亜鉛欠乏の回避）、 肥大促進、糖度アップ	500～800	3月～7月に掛けて	6回
果樹（ブドウ）	微量要素の補充、花ぶるい防止、 粒張りの向上、糖度アップ	500～800	展葉6枚、開花前、肥大期	4回
果樹（梨）	微量要素の補充、肥大促進、糖度アップ	500～800	展葉期、肥大期、収穫後	5～8回
工芸作物（花卉）	下葉の枯れ上がりの防止、 葉の厚み向上、日持向上、花の色艶	500～800	定植後～開花前	3～4回
工芸作物（お茶）	微量要素の補充、アンモニア栄養作物での 体内硝酸態窒素の軽減、収穫増加、 品質向上（アミノ酸含有量アップ）	500～800	摘採前、摘採後（1.2.3茶）	4～6回
芝生	根張り向上 （不耕起の為、各種微量要素の利用が困難）、 踏圧の軽減、すり切れ回復	500～800	刈り込みの前後	3～4回

灌水使用

作物	目的	散布濃度（倍）	散布時期	使用回数
本圃				
トマト	新根発生、成り疲れ防止、 収量アップ、品質向上	10ａ当たり 原液1～2L	定植後より液肥混入器を使用	1～2回/月
イチゴ				
キュウリ				
ナス、ピーマン				